

大東文化大学 東洋研究所所報

2024.7 No.81

目次

巻頭言 芸術と学術のあいだ ——伝記的人物研究と「ジョジョの奇妙な冒険」 東洋研究所 専任研究員・教授 鈴木 隆……………1	2024 年度 研究所 名簿……………9
2024 年度 東洋研究所共同研究課題……………2～3	新刊案内……………10
2023 年度 東洋研究所共同研究班活動報告 ……4～7	2024 年度 出版予定……………10
2023 年度 〔国際交流講演会〕「琉球列島のことば」 大東文化大学外国語学部日本語学科・助教 カルリノ・サルバトーレ……………8	訃報……………10
	2023 年度 発行 「東洋研究」……………11
	2024 年度 東洋研究所 秋の公開講座のお知らせ ……………12

芸術と学術のあいだ——伝記的人物研究と「ジョジョの奇妙な冒険」

東洋研究所 専任研究員・教授 鈴木 隆

過去数年来、私は、中華人民共和国の最高指導者である習近平氏の個人研究に取り組んできました。この「所報」の原稿を執筆している現在（2024年6月4日時点）、ようやくその研究成果を単著として発表できそうな段階にきています。編集や校正の作業が順調に進めば、今秋には書籍が刊行される見込みです（『最高実力者 習近平：支配体制と指導者の実像』東京大学出版会、近刊）。私にとっては二冊目の単著、人物研究としては初めての著書となります。

私の専門は政治学と中国地域研究ですが、当該書籍の叙述に際しては、特に数冊の書籍を参考にしました。例えば、高坂正堯氏の「宰相吉田茂論」（『宰相 吉田茂』中央公論新社、2006年所収）などは、特別意識したわけではないのですが、結果的に書籍のタイトルも似ています。そうした本の一冊に『荒木飛呂彦の漫画術』（集英社、2015年）があります。荒木飛呂彦氏といえば、代表作『ジョジョの奇妙な冒険』の作者であり、言わずと知れた現代日本の巨匠漫画家の一人です。同書は、漫画を「総合芸術」と語る作者が自身の作品を題材として漫画作成の技法を解説した本です。元々『魔少年ビーティー』や『パオー来訪者』など初期の作品からの愛読者であった私が、本書を一読した時の驚きは、ヒットする漫画作品というものへの考察の深さと、それに対する作者の自己分析力の高さでした。

実際、「読ませるものを書く」という方法論の点でも、上記『漫画術』は多くの示唆に富んでいます。荒木氏によれば、漫画作品の「基本四大構造」はキャラクター、ストーリー、世界観、テーマですが、私が思うにこれらは、政治家の評伝を物す際にもほぼそのまま適用が可能です。ただし世界観については、私のような地域研究の政治学者は、自身が属するのとは異なる歴史・文化・言語体系との知的格闘を、「政治的翻訳」の形で実践することが求められます。

一方、『ジョジョの奇妙な冒険』の有名なキャラクターに、作者自身がモデルといわれる岸部露伴がいます。岸部の特殊能力（スタンド）は、他人を文字通り「本」に変え、その記憶や体験を「読む」ことでその人物を理解したり、記憶に新たな言葉を「書きこむ」ことで行動変容をもたらしたりします。史料を読んでいる時、私も習近平氏のアタマの中を覗き見しているような感覚を得たことは事実です。また、研究成果を通じ、習氏の記憶や体験の一部へと読者を追体験に導いたり、政策形成にながしかの影響を与えることで習氏の行動変容を促したりする可能性にも期待しています。要するに、私自身がスタンド使いの特殊能力者であるかのように錯覚したのです。

しかし、初稿を書き終えた段階で思ったのは、そのような本を書くことで、分析対象である習近平氏よりも、むしろ私自身のアタマの中を読者に曝け出しているという非常に恥ずかしい行為をしているという自覚でした。この点、相手を特殊能力によって理解するという漫画を描く作者の発想を、読者はあまり意識しません。優れた漫画作品は、読者をその世界観に感情レベルで没入させるからでしょう。ところが地域研究の政治学では、おそらくは対象との文化的共通性の低さ（いわゆるローコンテクスト）のゆえに、分析対象への理解が政治的翻訳にすぎないことが読者にとって自明の理であり、{分析対象—分析者}—読者の認識の入れ子構造が、哀しいかな明白なのです。漫画家荒木飛呂彦の偉大さを改めて痛感しました。研究者としてある程度キャリアを積むと、研究という営為がそうした羞恥心を含めて成り立っていることを忘れがちですが、この意味でも初心に立ち戻ることの大切さに改めて気づかされました。

(すずき たかし 東洋研究所専任研究員・教授)

2024年度 東洋研究所共同研究課題

第1班	中華人民共和国100年史研究—日中関係の今後を見据えて
	期間 2023～2025年度（研究期間中）
	メンバー（14名） 団 高田 茂臣〔主任〕、齊藤 哲郎、鹿 錫俊 団 笠屋 一、伊藤 一彦、植松 希久磨、江崎 隆哉、岡崎 邦彦、篠永 宣孝、柴田 善雅、嶋 亜弥子、由川 稔、田中 寛、福田 和展
第2班	類書文化研究—『藝文類聚』を中心に—
	期間 2023～2025年度（研究期間中）
	メンバー（10名） 団 田中 良明〔主任〕 団 小塚 由博、高橋 睦美、宮瀧 交二、藏中 しのぶ 団 芦川 敏彦、小林 敏男、中林 史朗、成田 守、浜口 俊裕
第3班	アジア史のための欧文史料の研究
	期間 2023～2025年度（研究期間中）
	メンバー（4名） 団 滝口 明子〔主任〕、アンドリュウ・リチャード・ウルック 団 出田 恵史、齋藤 俊輔
第4班	唐・李鳳の『天文要録』の研究（訳注作業を中心として）
	期間 2022～2024年度（研究期間中）
	メンバー（9名） 団 田中 良明〔主任〕、高橋 あやの 団 小坂 眞二、小林 春樹、中村 聡、中村 士、細井 浩志、山下 克明、渡邊 義浩
第5班	茶の湯と座の文芸
	期間 2023～2025年度（研究期間中）
	メンバー（12名） 団 藏中 しのぶ〔主任〕 団 相田 満、王 宝平、オレグ・プリミアニ、菅野 友巳、笹生 美貴子、高木 ゆみ子、布村 浩一、フレデリック・ジラル、松本 公一、三田 明弘、矢ヶ崎 善太郎
第6班	西アジア地域における社会と文化の伝統・交流・変容—イラン・アラブ・トルコ文化圏の越境—
	期間 2024～2026年度（継続）
	メンバー（16名） 団 栗山 保之〔主任〕 団 吉村 武典 団 アブドリ・ケイワン、石井 啓一郎、遠藤 仁、藏田 明子、斎藤 正道、鈴木 珠里、ソレマニエ 貴実也、登利谷 正人（新）、中村 菜穂、南里 浩子、西川 優花、原 隆一、深見 和子、吉田 雄介
第7班	岡倉天心（覚三）にのっての「伝統と近代」
	期間 2022～2024年度（研究期間中）
	メンバー（8名） 団 宮瀧 交二〔主任〕 団 池田 久代、岡倉 登志、岡本 佳子、佐藤 志乃、篠永 宣孝、田辺 清、依田 徹

第7班	<p>らびにフェノロサについて哲学を学び、卒業後、フェノロサの日本美術研究に協力し、古美術の研究と新しい日本画の樹立を旨とした。86年文部省の美術取調委員としてフェノロサとアメリカ経由でヨーロッパを巡り翌年帰国、東京美術学校の創設、90年校長に就任した。</p> <p>この間美術専門誌『国華』を創刊、日本絵画協会主宰、帝室技芸員選抜委員、古社寺保存会委員に任ぜられ、98年校長を辞職、橋本雅邦、横山大観、菱田春草、下村観山らと日本美術院を創設、新しい日本画を旨として美術運動をおこした。1904年（明治37）大観、春草を伴い渡米し、ボストン美術館の仕事にあたり、05年同館の東洋部長となり、06年ニューヨークで『茶の本』を出版、その末に日本美術院を茨城県五浦へ移し、大観、春草、観山らと住み、07年文部省美術審査委員会委員となり、08年国画玉成会を結成、10年東京帝国大学で『泰東巧芸史』を講義した。翌年欧米旅行を行い、ハーバード大学からマスター・オブ・アーツの学位を受けた。続いて12年インド、ヨーロッパを経て渡米し、13年（大正2）病を得て帰国、療養に努めたが、同年9月2日新潟県赤倉山荘で没した。英文著書『東洋の理想』1903、『日本の覚醒（かくせい）』1904、『茶の本』1906などは外国人はもちろん、翻訳されて広く日本人にも影響を与えた。</p> <p>岡倉天心研究はまだまだ研究されなければならない点があるが、本研究部会においては、岡倉天心の「伝統と近代」に着目し幅広い研究を進めて行きたい。</p>
第8班	<p>南アジアの社会変動と文化的創造力の研究</p> <p>期間 2024～2026年度（継続）</p> <p>メンバー（14名） 団 鈴木 真弥〔主任〕、小尾 淳（新）、J・アバイ、須田 敏彦、井上 貴子 団 篠田 隆、石坂 晋哉、石田 英明、片岡 弘次、舟橋 健太、増木 優衣、ムハマド・ズベル、村山 和之（新）、シュレヤ・ワグ（新）</p> <p>概要 1990年代以降、南アジアは急激な経済発展と社会・文化変容を遂げている。多言語多民族国家により構成されている南アジアでは、近年の政治経済社会変動のなかで、南アジア的な社会的紐帯の維持がさまざまに模索されている。</p> <p>本研究では、そうした社会変動の要因を検討することに加えて、多様な民族、宗教、カースト、階級構成をもつ南アジア社会で生きる人びとが、激変する社会・文化状況にたいして、どのように応答し、自らが主体となって異議申し立てや新しい文化的価値を創造しているのかについても分析する。彼らはどのような文学、政治、社会運動をとおして、自らの行動規範や価値観を再構成し新たなアイデンティティを模索しているのか、そこではどのような社会的格差や困難が生まれているのかを、社会学、宗教学、経済学、歴史学、文学を専門とする委員の共同作業をとおして、総合的に研究する。</p>
第9班	<p>明清の文言小説と文人たち—張潮『虞初新志』訳注—</p> <p>期間 2023～2025年度（研究期間中）</p> <p>メンバー（5名） 団 小塚 由博〔主任〕 團 田中 良明 団 荒井 礼、今井 秀和、小田 健太（新）</p> <p>概要 清初の文人張潮が編纂した文言小説集『虞初新志』を訓読し、現代日本語に翻訳し、注釈等を施す。『虞初新志』には全20巻、150作品が収められている。明から清にかけて、「虞初」の名を冠した小説集が複数編纂されたが、とりわけ本作品は過去（六朝・唐等）の作品を集めたのではなく、同時代人の人物の作品を集めたことが大きな特徴である。彼らは編者張潮の友人・知人が多く、彼の交遊関係が大きく影響している。また、本作品は中国だけではなく、日本にも江戸時代中期以降に伝来し、和刻本が刊行されており、日本文学との関係も見られる。すでに作者、作品の解説・序文・跋文・凡例および巻一～巻三の訓・訳については、2022年2月に刊行済み（2019～2021年度研究班）であり、次は2025年2月を目途に巻四～巻六の三巻分の訓・訳を刊行し、以後3年に1冊のペースで訳注を刊行する予定である。</p>
第10班	<p>インド洋が取り結ぶ東西交流の諸相に関する研究</p> <p>期間 2024～2026年度（継続）</p> <p>メンバー（5名） 団 栗山 保之〔主任〕 団 新居 洋子、吉村 武典 団 新井 和広、太田 啓子</p> <p>概要 インド洋は、東アフリカ、西アジア、南西アジア、南アジア、そして東南アジアといった諸地域に縁どられた大洋である。古来、このインド洋を介して、これらの諸地域に居住する人びとは、ひんばんに交流していた。このような、インド洋を往来していた人びと、あるいは人びとが携え流通していたさまざまなモノ、または人やモノが動くことによって伝わる情報・技術・文化などの諸相について考察することが、本研究の目的とするところである。</p> <p>本研究でインド洋を中心に取り上げる理由は、近年、中国がインド洋への進出を活発化させ、米国をはじめとする欧米諸国やアジア・アフリカ諸国はその対応に迫られており、いわばインド洋を舞台とした世界情勢の変容が観察されるようになってきているからである。この意味において、インド洋を中心とした東西交流の検証は、歴史的な事柄を考察すると同時に、すぐれて現代的な議論でもあると言えるのである。本研究で考察する東西交流とは、インド洋を舞台として、同海洋の東西に位置するヨーロッパやアフリカ、そしてアジアの間で展開していた、人・モノ・情報の往来・流通・伝播と、それらに関連・由来する諸事象を意味している。こうした交流の問題は、非常に多種多様な歴史的事象を包含していると考えられる。</p> <p>具体的には、イスラームが誕生した西暦7世紀前後からポルトガルをはじめとする西欧列強がインド洋でその勢力を拡大する18世紀ごろまでにおいて、ムスリム、キリスト教徒、ユダヤ教徒、あるいは仏教徒などの商人、職人、学生、旅人、軍人、船乗りといったじつにさまざまな職能を有する人びとが、商業、貿易、軍事、就職、修学、旅行、航海といったいろいろな目的の完遂をもとめて、自らが誕生し生活している社会、地域、あるいは国家から、異なる社会、地域、国家などへと、インド洋をわたって移動、移住、定着、帰還し、そうした営為が一時的、あるいは継続的に、そして相互的、または重層的に展開していたことを考察したいと考えている。</p>
第11班	<p>集中・収縮・生成：21世紀中国の構造変動マッピングの基礎的研究</p> <p>期間 2024～2026年度（新規）</p> <p>メンバー（8名） 団 鈴木 隆〔主任〕 団 岡本 信広、内藤 二郎、野嶋 剛、森 路未央 団 神谷 幸宏、諏訪 一幸、菱田 雅晴</p> <p>概要 本研究は、中華人民共和国（以下、中国と略記）、香港、台湾を分析対象とし、習近平政権が始動した2010年代以降、現在までに、上記地域で生じた構造的变化について、政治・経済・社会・外交の各方面から分析する。またこれを手がかりとして、長期化が見込まれる習近平時代の将来展望を行う。その際、分析の視角として、集中・収縮・生成のキーワードが示すように、今後の中国の社会変動の基底的要因として、①最高指導者への権力集中、②人口減少による経済・社会の収縮、③生成AIに代表される人工知能革命の3つに焦点を当てる。</p> <p>本研究はまた、中国、香港、台湾のそれぞれの通時的変化はもちろん、日本や韓国など北東アジアの異なる国や地域との共時的比較をも念頭に置いて分析を進める。将来における、より大規模で総合的な国際研究に向けた知的基盤と実践的足がかりを得るためのパイロットスタディの意味合いも持つ。本研究と関連する代表的研究として、1990年代後半に行われた文部省科学研究費補助金特定領域研究「現代中国の構造変動」（以下、旧・構造変動と略記）がある。旧・構造変動は、中国の歴史を「革命と政治が主導した毛沢東時代30年＝旧現代中国」と「経済と豊かさが増した鄧小平時代20年＝新現代中国」の2つに区分したうえで、政治、経済、社会、環境、歴史、国家統合、アジア世界との関係などの多方面から「新現代中国」について総合的な分析を行い、世界の学界にとって研究史上の大きな成果を残した。</p> <p>本研究では、①旧・構造変動で示された予測が、その後の展開によって部分的に裏切られた課題、②旧・構造変動の当時とは、認知されてはいたが、現実が追い付いておらず、掘り下げた検討がなされなかった課題、③旧・構造変動以来、20年間の時間的経過の中で新たに浮上した課題に取り組む。それゆえ、ポスト高度成長期の中国を扱う本研究は、旧・構造変動の問題意識を引き継ぎつつも、より高次のフォローアップ研究として、いわば「シニ（＝新）構造変動」と称することができる。この点、旧・構造変動の知見と経験を活かすべく旧・構造変動プロジェクトの統括責任者であった毛里和子氏を研究顧問に迎える。</p>
第12班	<p>東アジアの術数研究—中国の天文思想を中心に</p> <p>期間 2024～2026年度（新規）</p> <p>メンバー（11名） 団 高橋 あやの〔主任〕、田中 良明 団 浦山 あゆみ、浜田 久美子 団 伊藤 裕水、小倉 聖、梶島 雅弘、洲脇 武志、平岡 隆二、平澤 歩、細井 浩志</p> <p>概要 中国古代において、改暦は天命が革（あらた）まったことを人々に知らしめる制度改革の重要な一部であり、天体の運行を正確に把握することで天子たる威厳を示す一大事業であった。しかし、その役割は時代により変遷がある。また、改暦の議論（論暦）では暦と天象との不一致を科学的に解決しようとする視点だけでなく、経書・緯書の記述との一致、陰陽五行説など理論による権威づけがなされ、思想面でも時代の色を反映する。</p> <p>そこで本共同研究では、天文思想、古代術数思想、制度史、文化交流史などの研究者により、南北朝期以降の改暦の意義について多角的に検討する。内在する思想的意義を解明するため、正史の律暦志、曆志の読解を通じて、改暦がどのように議論され、暦が選択されたのかを考える。また外在する制度としての意義を解明するために、正史の礼儀志、礼志の読解を通じて、改暦に関する上表や国家運営上の意義について考える。あわせて、本紀・列伝、経書、類書なども適宜参照する。具体的には、3年間で『宋書』律暦志・礼志の関連部分を読解する。</p> <p>なお、オブザーバーとして岡田和一郎、戸川貴行も参加予定である。</p>

2023年度 東洋研究所共同研究班活動報告

中華人民共和国 100 年史研究 一日中関係の今後を見据えて				
研究班の活動				
No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会（テーマ・内容・発表者）
1	5月20日	大東文化会館 302 研修室	11名	第1報告：鈴木 隆「ロシア・ウクライナ戦争をめぐる中国の『教訓』」 第2報告：岡崎邦彦「中共百年年表の報告」（経過報告）
2	8月5日	大東文化会館 404 研修室	10名	報告者：高田茂臣「蒙疆政権官吏の日中戦争」
3	12月23日	大東文化会館 302 研修室	10名	第1報告：由川 稔「モンゴル国の国際投資環境」 第2報告：田中 寛「劉建輝編著『『満洲』という遺産 その経験と教訓』の書評」
4	2月28日	大東文化会館 302 研修室	12名	報告者：伊藤一彦「冷戦までの中朝関係史」
調査		新型コロナウイルス感染症の拡大により、調査活動はしていない		
No.	研究成果物（論文等）			
1	田中 寛 タイトル 「国分一太郎の戦地体験と中国民衆像 —『戦地の子供』、『外国権益』からの再検証—」 出版社等 『東洋研究』228号 発行年月 2023年7月25日			
2	篠永宣孝 タイトル 「日露戦争の起原と日露金融戦争（マネー・ウォー）」 出版社等 『東洋研究』228号 発行年月 2023年7月25日			
3	伊藤一彦 タイトル 「中国における朝鮮独立運動の展開」 出版社等 『東洋研究』228号 発行年月 2023年7月25日			
4	高田茂臣 タイトル 「蒙疆政権官吏の日中戦争」 出版社等 『東洋研究』第229号 発行年月 2023年11月25日			
5	柴田善雅 タイトル 「シベリア出兵期日本金融圏の拡張と朝鮮銀行の活動」 出版社等 『東洋研究』第230号 発行年月 2023年12月25日			
6	田中 寛 タイトル 「書評 劉建輝編著『『満洲』という遺産 その経験と教訓』」 出版社等 『植民地教育史研究年報』No.26 発行年月 2024年3月25日			
7	田中 寛 タイトル 「旅の記録 バンコク、延辺、ジャカルタの風に吹かれて—歴史を思索する旅—」 出版社等 『植民地教育史研究年報』No.26 発行年月 2024年3月25日			
類書文化研究 —『藝文類聚』を中心に—				
研究班の活動				
No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会（テーマ・内容）
1	4月15日	オンライン	7名	『藝文類聚』巻54 訓読
2	5月13日	オンライン	5名	『藝文類聚』巻54 訓読
3	6月24日	オンライン	5名	『藝文類聚』巻54 訓読
4	7月29日	オンライン	6名	『藝文類聚』巻54 訓読
5	9月9日	オンライン	6名	『藝文類聚』巻55 訓読
6	10月14日	オンライン	4名	『藝文類聚』巻55 訓読
7	11月25日	オンライン	7名	『藝文類聚』巻55 訓読
8	12月16日	オンライン	6名	『藝文類聚』巻55 訓読
9	1月17日	オンライン	6名	『藝文類聚』巻55 訓読
10	2月24日	オンライン	7名	『藝文類聚』巻55 訓読
11	3月16日	オンライン	8名	『藝文類聚』巻55 訓読
No.	研究成果物（刊行物等）			
1	『藝文類聚（巻五十二）訓読付索引』（2024年2月26日発行）			
アジア史のための欧文史料の研究				
研究班の活動				
No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会（テーマ・内容・発表者）
1	8月20日	オンライン	3名	今年度の共同研究計画について
2	11月9日	東松山キャンパス 第2研究棟4階小会議室	2名	研究成果の出版計画 本の内容と仕様等について

	3	11～12月 (数回)	オンライン	2名	大航海時代以降のポルトガル、インド、オランダ、イギリス、フランス、日本の関係～史料に基づく最近の研究動向について
	4	2024年 1～2月 (数回)	オンライン	3名	生田 滋 先生追悼 研究業績・翻訳・教科書等の出版刊行について
	(備考)	2024年1月17日(水)生田 滋 先生逝去(大東文化大学 国際関係学部名誉教授、東洋研究所研究班「西欧植民地主義再考」の中心メンバーとして長年にわたり研究を主導)			
第3班	No.	研究成果物(刊行物等)			
	1	滝口明子(研究資料)『茶の文化史—英国初期文献集成—』日本語解説(後半) A Collection of Early English Books on Tea: Notes in Japanese (Part II) (『大東アジア学論集』23号 2023年5月31日)			
	2	A. R. Woollock ① COVID+: The upside of COVID-19 in Japan - an extended photo essay (『大東アジア学論集』23号 2023年5月31日) ② Reading the Truman Show as a Metaphor for Contemporary Japanese Society (『大東アジア学論集』23号 2023年5月31日) ③ Washes whiter than white :Disassociative kata-kana and the Japanese cultural phenomenon of externalisation, a theoretical perspective (『東洋研究』229号 2023年11月25日) ④ Project e-ma revisited: Utilising e-ma as a means to explore hope with Chinese art and design students enrolled in a Sino-British collaborative campus in Dalian, China) (『大東文化大学紀要』62号 人文科学 2024年3月)			
3	齋藤俊輔(著書:共著)“Musical Influences of Brazilian and Other Foreign Residents in Local Culture and Community Formation in Oizumi”, <i>Unslient Strangers; Music, Minorities, Co-existence, Japan</i> (eds. Hugh de Ferranti et al.), 令和5年9月19日、151頁-173頁、査読有、欧文				
第4班	唐・李鳳撰の『天文要録』の研究(訳注作業を中心として)				
	研究班の活動(上半期)				
	今年度は、(1) 昨年度に引き続き、『天文要録』巻5「月占」の後半部分訳注原稿の整理を行うとともに、(2) 次巻の巻10「辰星占」読解の準備を行っている。(1)については田中を中心として、原稿整理という作業の特殊性から、作業が一定段階に至るまではメールによる検討を重ね、対面(もしくはオンライン)による研究会は後期に予定している。(次年度刊行予定)4-6月、原文、訓読文の草稿を整理。7-8月、現代語訳、語釈の試作。9月、メールによる共有、検討。(2)については高橋を中心として、テキストの翻刻と濱氏遺稿の整理を行っている。こちらについては、上記(1)の作業が一段落した後、班員と共有、検討していく。				
研究班の活動(下半期)					
前期に引き続き、(1)『天文要録』巻5「月占」の後半部分訳注原稿の整理を行うとともに、(2) 次巻の巻10「辰星占」読解の準備を行っている。(1)については田中を中心として、前期中に整理した原稿について、メールによる検討を重ねており、次年度からは対面(もしくはオンライン)による研究会を予定している。(再来年度刊行予定)10～3月、メールによる原稿の共有、検討。(2)については高橋を中心として、テキストの翻刻テキストデータ化と濱氏遺稿の整理を行い、すでに翻刻が完了している。こちらについては、上記(1)の作業が一段落した後、班員と共有、検討していく。					
第5班	茶の湯と座の文芸				
	研究班の活動(8月1日～9月17日まで夏期勉強会、8月14日はバリ研究会)				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会(テーマ・内容・発表者)
	1	4月16日	zoom 研究会	13名	「6 妙喜庵之図」「8 宗和長四畳横竹事 付勝手口窓事」(布村浩一・オレグ)
	2	5月28日	zoom 研究会	14名	「9 織部座敷寸法之事 付窓図」「10 織部流小棚・惣釘打所寸法事」(笹生・菅野)
	3	6月11日	zoom 研究会	11名	「10 織部流小棚・惣釘打所寸法事」(菅野)
	4	8月1日	zoom 研究会	12名	「10 織部流小棚・惣釘打所寸法事」「14 遠州流数寄屋寸法事 付鎖間①」(菅野)
	5	8月2日	zoom 研究会	13名	「14 遠州流数寄屋寸法事 付鎖間②」(布村)
	6	8月3日	zoom 研究会	10名	「11 同瓦灯口・突揚・嘔寸法事①」(布村)
	7	8月7日	zoom 研究会	10名	「11 同瓦灯口・突揚・嘔寸法事①」「11 同瓦灯口・突揚・嘔寸法事②」(布村・オレグ)
	8	8月8日	zoom 研究会	10名	「11 同瓦灯口・突揚・嘔寸法事②」(オレグ)
	9	8月14日	バリ研究会	3名	茶の湯と禅、和光同塵(ジラルール)
	10	8月28日	zoom 研究会	13名	「11 同瓦灯口・突揚・嘔寸法事②」(オレグ)
	11	8月30日	zoom 研究会	12名	「11 同瓦灯口・突揚・嘔寸法事②」(オレグ)
	12	9月1日	zoom 研究会	10名	「12 同腰張・太鞍張事 付額②」(布村)
	13	9月15日	zoom 研究会	6名	「13 同横竹・小棚寸法事」(オレグ)
	14	9月17日	zoom 研究会	10名	「11 同瓦灯口・突揚・嘔寸法事②」(笹生)
	15	9月21日	zoom 研究会	10名	「11 同瓦灯口・突揚・嘔寸法事②」(笹生)
16	10月29日	zoom 研究会	9名	「11 同瓦灯口・突揚・嘔寸法事②」「12 同腰張・太鞍張事 付額①」(高木、菅野)	
17	12月17日	zoom 研究会	14名	「12 同腰張・太鞍張事 付額①」(菅野)	
以降、巻十四の原稿再確認と、巻十五の校訂本文の作成をおこない、来年度の巻十五の研究にむけて準備を進めている。					
所属研究員の活動					
No.	講演、シンポジウム、刊行物等				
1	<ul style="list-style-type: none"> ○全学プロジェクト予算交付対象事業である「東洋学のいざない」において、相田満(2023.7.14)・布村浩一(2023.12.19)が講演を行った。 ○東洋研究所共催、大学院日本語文化学専攻主催「大東文化大学創立100周年・日本語学科開設30周年記念 第15回「東西文化の融合 国際シンポジウム「日本文化と日本語教育・国語教育が出逢うとき—白拍子・静御前と龍神の道、太陽の道」」で、藏中しのぶ、三田明弘、相田満が基調講演を行い、菅野友巳がパネルディスカッション「日本語学科『日本文化特別演習』の取り組み」のパネリストとして発表を行った。 ○『東洋研究』に、フレデリック・ジラルール(228号)、高木ゆみ子(230号)、藏中しのぶ(231号)が執筆した。 ○『水門—言葉と歴史—』31号(水門の会誌、勉誠社発行)に、院生オブザーバー参加の頼妍菲が「茶譜」所引「分類草人木」の本文©頼妍菲を掲載した。 				

西アジア地域における社会と文化の伝統・交流・変容 —イラン・アラブ・トルコ文化圏の越境—					
第6班	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	研究会（テーマ・内容・発表者）	
	1	5月21日	大東文化会館 K404 研修室および Zoom オンライン (14:00～17:30)	第1回 大東 西アジア研究会 報告者1: 斎藤正道 (東洋研究所兼任研究員) 「ヘジャープ問題をめぐる若干の試論」 報告者2: ケイワン・アブドリ (神奈川大学/東洋研究所兼任研究員) 「マフサー運動の本質について: これは「革命運動」なのか?」	
	2	8月6日	大東文化会館 K404 研修室および Zoom オンライン (14:00～17:30)	第1回 大東 西アジア研究会 報告者1: 中村菜穂 (大阪大学/東洋研究所兼任研究員) 「ミールザード・エシュギーの戯曲『黒い経帷子』とイラン女性運動との接点」 報告者2: 鈴木珠里 (中央大学/東洋研究所兼任研究員) 「フォルグの系譜 独自のスタイルを貫いた詩人、アフマドレザー・アフマディについてのノート」	
	3	2月18日	大東文化会館 K301 研修室および Zoom オンライン (14:00～17:30)	第3回 大東 西アジア研究会 報告: 原隆一 (大東文化大学名誉教授/東洋研究所兼任研究員)、南里浩子 (東洋研究所兼任研究員)、遠藤仁 (東洋研究所兼任研究員) 「『大野盛雄フィールドワークの軌跡』全5巻を振り返って」 打合せ: 2023年度研究報告、2024年度研究計画について	
	所属研究員の活動				
	No.	刊行物等			
	1	・遠藤仁 「ピースからみたナイル川流域世界—エジプト、スーダンにおける過去と現在」『季刊民族学』185 (2023): 14-19 頁			
	2	・中村菜穂、ケイワン・アブドリ 「『君は行先を知らない』を読み解く」『君は行く先を知らない』松竹株式会社事業推進部、2023年8月25日発行、14-17 頁			
	3	・中村菜穂、ケイワン・アブドリ 「『君は行先を知らない』監督パナー・パナヒを読み解く」『君は行く先を知らない』松竹株式会社事業推進部、2023年8月25日発行、18-19 頁			
4	・吉田雄介 「近代期の神戸を経由した植民地内交易ネットワーク—ハッサム商会の破綻と事業継承を事例に—」『東洋研究』229号 (2023年11月)、(1)-(26) 頁				
5	・原隆一、南里浩子編 「大野盛雄フィールドワークの軌跡 V—トルコ・アナトリア高原の地方町カマン調査から—1994～2000年—」大東文化大学東洋研究所、2024年				
6	・Naoko Fukami, Susumu Sato, Yuta Arai, Takenori Yoshimura, Yuko Abe, and Wakako Kumakura, "Morphological Analysis of Nineteenth-Century Cairo" in Abd Alla Gad et. al. eds., Applications of Remote Sensing and GIS Based on an Innovative Vision: Proceeding of The First International Conference of Remote Sensing and Space Sciences Applications, Egypt 2022, Springer, 2023, pp.99-105				
第7班	岡倉天心 (覚三) にとつての「伝統と近代」				
	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	種別	研究会（テーマ・内容・発表者）
	1	5月27日	埼玉会館	学会発表	「小松宮彰仁親王の茶道具蒐集—仙波家と伊木家を中心に—」茶の湯文化学会東京例会 (依田徹)
	2	6月10日	学習院大学	学会発表	「江戸幕府老中と茶—稲葉家と阿部家—」茶の湯文化学会大会 (依田徹)
	3	6月10日	富士見市立鶴瀬公民館・コミュニティセンターホール	講演	「教育者、偉大なるプロデューサーとしての岡倉天心」NPO法人富士見市民大学主催/令和5年度富士見市民大学開講式記念講演 (宮瀧交二)
	4	7月29日	柿傳 (新宿)	講演	「皇室と茶の湯」茶道夏期大学 (依田徹)
	5	7月29日	横浜市技能文化会館 801号室	講演	「岡倉覚三・織田得能の東洋宗教会議と近代アジアの宗教者たち」第50回 岡倉天心市民研究会 (岡倉天心横浜顕彰会) (岡本佳子)
	6	8月20日	一燈園 (京都)	講演	「静坐・禅仏教・マインドフルネスが出会うところ3—岡田虎二郎と「静坐」を軸として」登壇者: 名倉幹 (静坐同人、NY浄土真宗開教師)、横田南嶺 (臨済宗門覚寺派管長・花園大学総長)、池田久代 (ティク・ナット・ハン翻訳者)
	7	3月8日	國學院大學博物館	見学会	開催中の企画展「権園好古図譜 北武蔵の名家根岸家古物 (たから)」見学
8	3月16日	大東文化会館 K404 研修室	研究会	「フェノロサ研究の現状と岡倉天心研究」(講演者: 川崙一穂、田邊健)	
No.				刊行物等	
1	・篠永宣孝 「日露戦争の起原と日露金融戦争 (マネー・ウォー)」『東洋研究』第228号、2023年7月				
2	・岡本佳子 「講演録/岡倉覚三・織田得能の東洋宗教会議と近代アジアの宗教者たち」岡倉天心市民研究会 (岡倉天心横浜顕彰会) 編『天心報』第50号、2023年9月17日、1～14 ページ				
3	・田辺 清 「レオナルド・ダ・ヴィンチの素描様式と東方—初期作品と《レダと白鳥》をめぐって—」(大東文化大学東洋研究所『東洋研究』230号)、2023年12月				
4	・岡本佳子 岡倉覚三が描く「道教」—「茶の本」と20世紀転換期の寓話—(大東文化大学東洋研究所『東洋研究』230号)、2023年12月				
5	・岡倉登志 「岡倉天心をめぐる人々—フェノロサ門下の友人たち(4)—井上哲次郎と有賀長男」(大東文化大学東洋研究所『東洋研究』231号)、2024年1月				

第8班	南アジアにおける包摂と排除				
	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会（テーマ・内容・発表者）
	1	6月9日	Zoom式	8名	(1) 各班員より近況報告 (2) 増木優衣 『ヴァールミーキはどこへ行けばよいのか——現代インドの清掃人カースト差別と公衆衛生の民族誌』（春風社、2023年）の著者解題
	所属研究員の活動				
	No.	刊行物等			
	1	・篠田隆 「インド・グジャラート州における家庭食の変容——アーメダバード市の都市中産階級世帯の事例研究」『東洋研究』第228号、2023年			
	2	・Takako Inoue, “Musical Activities among South Indians around Tokyo: Forming a Cultural Cohort.” Hugh de Ferranti, Masaya Shishikura, and Michiyo Yoneno-Reyes eds., <i>Unsilent Strangers: Music, Minorities, Coexistence, Japan</i> , Singapore: NUS Press, 2023: 226-253.			
	3	・井上貴子 「インドにおける宗教・芸術・売春」、山口みどり・弓削尚子・後藤絵美・長志珠絵・石川照子編著『論点・ジェンダー史学』ミネルヴァ書房、2023年：104-105頁。			
	4	・須田敏彦 「(研究ノート) コロナ後のバングラデシュ農村を歩く——フィールドノート・クミッタ県編」『東洋研究』第231号、2024年			
	5	・石田英明 編集 『ヒンディー文学8号』、2024年2月3日発行、日本ヒンディー文学会			
	6	・石田英明 翻訳 Shivmurti 作、「鬼の棲む村 Kasaibara」、『ヒンディー文学8号』、2024年2月3日発行、日本ヒンディー文学会、pp.37-62.			
7	・鈴木真弥 『カーストとは何か——インド「不可触民」の実像』中央公論社、2024年。				
8	・Maya SUZUKI, “Socio-spatially Segregated Experience of Urban Dalits and their Anti-caste Imagination: A Study of the Balmiki Community in Delhi, India,” <i>CASTE / A Global Journal on Social Exclusion</i> 4 (2): 196-212, 2023.				
9	・石坂晋哉 「チブコー（森林保護）運動50年」『歴史学研究』No.1041、105-113頁、2023年10月				
10	・井上貴子 「インド・ナショナリズムと女性歌手」『ジェンダー事典』丸善、2024年1月、530ページ				
11	・井上貴子 「インドのヒジュラー」154-155頁、「インドのデーヴァダーシー（寺院・芸能・売春）」252-253頁、三成美保・小浜正子・鈴木則子編『「ひと」から問うジェンダーの世界史 第1巻「ひと」とはだれか?』大阪大学出版会、2024年3月。				
第9班	明清の文言小説と文人たち —張潮『虞初新志』訳注—				
	研究班の活動（第4回研究会より、2024年度から研究班に加入の小田健太氏もオブザーバー参加）				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会（テーマ・内容）
	1	4月23日	zoomによるオンライン研究会	4名	『虞初新志』巻五「秦淮健兒傳」の訓読・翻訳の検討
	2	5月28日	zoomによるオンライン研究会	4名	『虞初新志』巻五「雷州盜記」の訓読・翻訳の検討
	3	6月25日	zoomによるオンライン研究会	4名	『虞初新志』巻五「林四娘記」の訓読・翻訳の検討
	4	7月23日	zoomによるオンライン研究会	4名	『虞初新志』巻五「乞者王翁傳」の訓読・翻訳の検討
	5	9月24日	zoomによるオンライン研究会	4名	『虞初新志』巻五「孫文正黃石齋兩逸事」の訓読・翻訳の検討
	6	11月26日	zoomによるオンライン研究会	4名	『虞初新志』巻五「郭老僕墓誌銘」の訓読・翻訳の検討
	7	1月28日	zoomによるオンライン研究会	4名	『虞初新志』巻五「張南垣傳」の訓読・翻訳の検討
8	2月25日	zoomによるオンライン研究会	4名	『虞初新志』巻五「花隱道人傳」の訓読・翻訳の検討	
第10班	インド洋が取り結ぶ東西交流の諸相に関する研究				
	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会（テーマ・内容・発表者）
	1	5月26日	オンライン開催	5名	「アラブの船乗りたちの航海技術」（栗山保之）
	2	8月25日	オンライン開催	5名	「墓参を通して見た世界：ハドラマウト、フライダの墓参とインド洋世界」（新井和広）
	3	12月22日	オンライン開催	5名	「シャリーフ＝カタールと12-13世紀のメッカ」（太田啓子）
4	2月23日	大東文化会館3階 K-302	5名	「教科書等における「典札問題」観—その形成および史料との比較—」（新居洋子）	
所属研究員の活動					
No.	研究成果物（いずれも論文）				
1	・栗山保之 「インド洋のムアッリム」『東洋研究』230号、(83)-(113)ページ				
2	・新井和広 「家系の広がり」と墓参の役割：20世紀初頭の南アラビア・ハドラマウト地方の事例から」『東洋研究』231号、(29)-(55)ページ				

〔国際交流講演会〕 「琉球列島のことば」

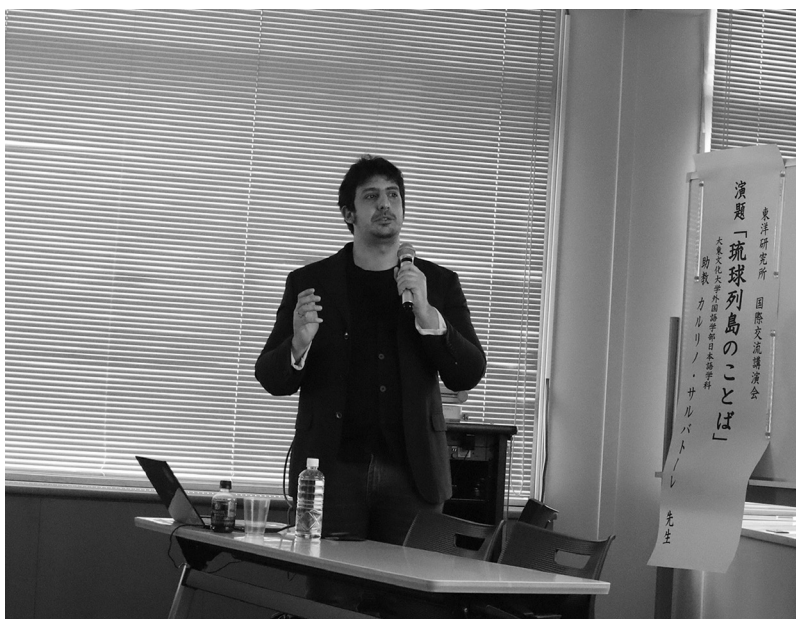
大東文化大学外国語学部日本語学科・助教 カルリノ・サルバトーレ

2024.2.28 (水) 10:00 ~ 11:30

大東文化大学板橋校舎 3号館 1階 3-0101 教室 (法廷教室)

琉球列島で話される諸言語のことは琉球諸語と呼ばれ、喜界島から与那国までという、かつて存在していた琉球王国の元領土で話されている。琉球諸語は北琉球語群と南琉球語群に分けられる。北琉球諸語はさらに奄美諸島で話される奄美語、沖縄諸島で話される沖縄語に分類される。南琉球語群は宮古諸島で話される宮古語、八重山語で話される八重山語、与那国で話される与那国語に分類される。琉球諸語は日本語(諸方言)の下位分類ではない。日本語と共通の祖先をもっており、「系統関係」にある「姉妹言語」である。琉球諸語の祖先である

琉球祖語と日本語諸方言の祖語は奈良時代に分岐し、その話者はおそらく圧力を受けて平安時代に九州から琉球にわたったとされている。琉球諸語は日本語とはもちろん、互いにも相互理解度が低く、多様性に満ちており、世界の言語の中でも珍しい言語現象がみられる。残念ながら琉球諸語の一般的な話者は60代以上で、その下の世代は聞いたらわかるが話せない、そしてより若い世代となると聞いてもわからない。つまり若年層への継承が行われていない消滅の危機にある言語である。その背景に日本への同化政策がある。その継承と復興を保証するため、研究者が記述活動を進めるとともに、現地でその話者が話せる権利を守ってくれる、そして若い世代に学ぶ機会を与える具体的な政策も求められている。



■名簿

管理委員会委員 (6名)

- 1 栗山保之
- 2 鈴木隆
- 3 田中良明
- 4 小塚由博
- 5 宮瀧交二
- 6 吉村武典
- 7 高橋あやの※
(※=オブザーバー)

専任研究員 (4名)

- 1 栗山保之 (所長)
- 2 鈴木隆
- 3 田中良明
- 4 高橋あやの

事務室 (3名)

- 1 金山弘通
- 2 飯田百恵
- 3 宮本恵

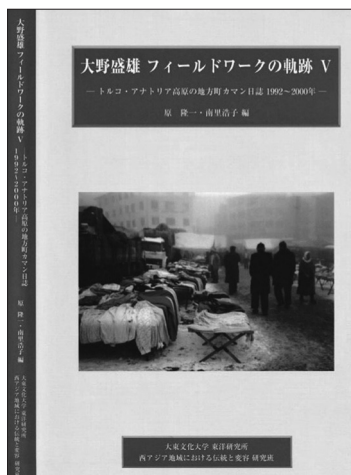
兼担研究員 (22名)

- 1 小塚由博
- 2 高橋睦美
- 3 宮瀧交二
- 4 新居洋子
- 5 浜田久美子
- 6 内藤二郎
- 7 J アバイ
- 8 藏中しのぶ
- 9 森路未央
- 10 齊藤哲郎
- 11 岡本信広
- 12 小尾淳
- 13 須田敏彦
- 14 滝口明子
- 15 アンドリュー リチャードウルク
- 16 井上貴子
- 17 浦山あゆみ
- 18 鹿錫俊
- 19 鈴木真弥
- 20 吉村武典
- 21 高田茂臣
- 22 野嶋剛

兼任研究員 (80名)

- 1 相田満
- 2 芦川敏彦
- 3 アブドリ・ケイワン
- 4 鏡屋一
- 5 新井和広
- 6 荒井礼
- 7 池田久代
- 8 石井啓一郎
- 9 石坂晋哉
- 10 石田英明
- 11 出田恵史
- 12 伊藤一彦
- 13 伊藤裕水
- 14 今井秀和
- 15 植松希久磨
- 16 江崎隆哉
- 17 遠藤仁
- 18 太田啓子
- 19 王宝平
- 20 岡倉登志
- 21 岡崎邦彦
- 22 岡本佳子
- 23 小倉聖
- 24 小田健太
- 25 オレグ・プリミアニーニ
- 26 片岡弘次
- 27 梶島雅弘
- 28 神谷幸宏
- 29 菅野友巳
- 30 藏田明子
- 31 小坂眞二
- 32 小林敏男
- 33 小林春樹
- 34 小林龍彦
- 35 齋藤俊輔
- 36 斎藤正道
- 37 笹生美貴子
- 38 佐藤志乃
- 39 篠永宣孝
- 40 篠田隆
- 41 柴田善雅
- 42 嶋亜弥子
- 43 シュレヤ・ワグ
- 44 鈴木珠里
- 45 諏訪一幸
- 46 洲脇武志
- 47 ソレマニエ 貴実也
- 48 高木ゆみ子
- 49 田中寛
- 50 田辺清
- 51 登利谷正人
- 52 中林史朗
- 53 中村聡
- 54 中村士
- 55 中村菜穂
- 56 成田守
- 57 南里浩子
- 58 西川優花
- 59 布村浩一
- 60 浜口俊裕
- 61 原隆一
- 62 平岡隆二
- 63 平澤歩
- 64 菱田雅晴
- 65 深見和子
- 66 福田和展
- 67 舟橋健太
- 68 フレデリック・ジラール
- 69 細井浩志
- 70 増木優衣
- 71 松本公一
- 72 三田明弘
- 73 村山和之
- 74 ムハマド・ズベル
- 75 矢ヶ崎善太郎
- 76 山下克明
- 77 由川稔
- 78 吉田雄介
- 79 依田徹
- 80 渡邊義浩

新刊案内

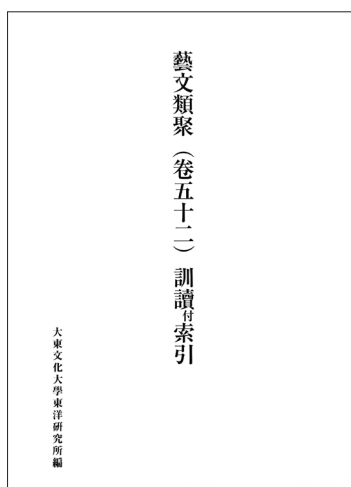


『大野盛雄 フィールドワークの軌跡 V』大東文化大学東洋研究所編

大東文化大学東洋研究所「西アジア地域における社会と文化の伝統・交流・変容—イラン、アラブ・トルコ文化圏の越境—」の研究班（原 隆一・南里浩子 編）
2024年2月26日発行／B5判 251頁／ISBN 978-4-904626-50-4／頒価 5,000円（税別）

本書は、『大野盛雄フィールドワークの軌跡』シリーズ（全5巻）のうち最終巻となる第V巻にあたる刊行物である。副題に「トルコ・アナトリア高原の地方町カマン日誌—1992～2000年」とあるように、その舞台となったのがトルコの地方町カマンである。この町に住みこみ、毎週のようにひらかれる野菜定期市の観察や商店街の住民たちとの交流を通して、人びとの生活やその行動、そして、宗教や政治など地方から中央の動きを見つめる様子が詳しく記録されている。

トルコ・イズミルに半年間以上の「留学」滞在した1992年から逝去する前年の2000年までの9年間の期間をとりあつかっている。なかでも、「米の道」科研調査を1993年に終えると同時に最後の力を振り絞るように翌年の1994年からは、家を借りて毎年数カ月間滞在しながら最後のトルコ・カマン調査に集中していった。この期間の様子が中心となっている。同じ頃、大野氏の最晩年にあたる1990年代後半には、1996年のユーラシア横断バス旅行55日間と1999年の3ヶ月近くに及ぶ世界一周航海など、陸と海の2度にわたる長距離踏査旅行を実施している。それは病魔と戦いながらの壮絶な旅でもあった。



『藝文類聚 (巻五十二) 訓読付索引』大東文化大学東洋研究所編

「藝文類聚」研究班（代表 田中良明）
芦川敏彦・藏中しのぶ・小塚由博・小林敏男・高橋睦美・田中良明・中林史朗・成田 守・浜口俊裕・宮瀧交二
2024年2月26日発行／B5判 85 (48,37) 頁／ISBN 978-4-904626-51-1／頒価 2,000円（税別）

「藝文類聚」は中国の類書の中でも早い成立に属する類書で、日本文学への影響は計り知れないものがある。その『藝文類聚』を巻ごとに訓読文を施し、四部叢刊に採録されている作品については校異を付し、最後に利用者の便を考慮して重要語彙索引を掲載したものである。

本巻には『藝文類聚』巻52 治政部上（論政 善政 赦宥）の訓読文・校異・注（典故）・索引を収めている。《既刊》巻1～16、巻45～51、巻80～89

2024年度 出版予定

- | | |
|---------------------|-------------|
| 『藝文類聚 (巻五十三) 訓読付索引』 | 2025年2月発行予定 |
| 『茶譜』 巻十四 注釈 | 2025年2月発行予定 |
| 『虞初新志 訳注 巻四～巻六』 | 2025年2月発行予定 |

◆ 訃報 ◆ 謹んでお悔やみ申し上げます。

- 生田 滋 殿（元東洋研究所兼任研究員）（2024年1月17日）
小川陽一 殿（元東洋研究所兼任研究員）（2024年1月20日）
松本照敬 殿（元東洋研究所長・東洋研究所教授）（2024年3月25日）

東洋研究所 X 公式アカウントを 開設しました

この度、東洋研究所 X 公式アカウントを開設いたしました。イベントや刊行物案内、メディア掲載を中心に、東洋研究所の情報を発信していきます。ぜひフォローをお願いいたします！



@daito_toyoken

第228号(2023年7月25日発行)

フレデリック ジラルール／日本の哲学・宗教・文学における「人間の本性」「存在の意義」「多重層の存在論」の探求—『大乘起信論』を通して—

- 田 中 寛／国分一太郎の戦地体験と中国民衆像—『戦地の子供』、『外国権益』からの再検証—
 篠 永 宣 孝／日露戦争の起源と日露金融戦争（マネー・ウォー）
 伊 藤 一 彦／中国における朝鮮独立運動の展開
 篠 田 隆／インド・グジャラート州における家庭食の変容—アーマダバード市の都市中産階級世帯の事例研究—

第229号(2023年11月25日発行)

- 布 村 浩 一／「牡丹」の表現史
 吉 田 雄 介／近代期の神戸を經由した植民地内交易ネットワーク—ハッサム商会の破綻と事業継承を事例に—
 高 田 茂 臣／蒙疆政権官吏の日中戦争
 A.R. ウルック／白よりも白く洗う—分離型カタカナと外在化という日本の文化現象 理論的展望—

第230号(2023年12月25日発行)

- 高 木 ゆみ子／藤原頼長と音楽—『台記』を中心に（四）久安年間—
 岡 本 佳 子／岡倉覚三が描く「道教」—『茶の本』と20世紀転換期の寓話—
 柴 田 善 雅／シベリア出兵期日本金融圏の拡張と朝鮮銀行の活動
 栗 山 保 之／インド洋のムアッリム—ポルトガル来航期における船乗りの一類型—
 田 辺 清／レオナルド・ダ・ヴィンチの素描様式と東方—初期作品と《レダと白鳥》をめぐって—

第231号(2024年1月25日発行)

- 高 橋 あやの／南宋『中興四朝国史』天文志の特徴—『文献通考』象緯考を手掛かりとして
 藏 中 しのぶ／『南総里見八犬伝』の富士山図—仇討ち譚と『維摩経』「不二法門」附、稗史七則と「対」の構造—
 岡 倉 登 志／岡倉天心をめぐる人々—フェノロサ門下の友人たち（4）—井上哲次郎と有賀長雄
 新 井 和 広／家系の広がりとは墓参の役割：20世紀初頭の南アラビア・ハドラマウト地方の事例から
 須 田 敏 彦／（研究ノート）コロナ後のバングラデシュ農村を歩く—フィールドノート・クミッラ県編—

この他の東洋研究所刊行物についてはホームページをご覧ください。

※2024年4月1日～2025年2月28日まで、東洋研究所刊行物を特別価格で販売中です。詳細は下記URL及び右下のQRコードをご覧ください。

https://www.daito.ac.jp/research/laboratory/oriental/news/details_15_40339.html

刊行図書取扱店

■(有)池上書店

〒175-8571 板橋区高島平1-9-1 大東文化大学2号館B1
 TEL: 03-3932-7567 FAX: 03-3932-7544
 E-mail: ikegami.bookstore@gmail.com

■大東文化大学内購買部 (株)進明堂書店

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿560
 TEL: 0493-34-4430 FAX: 0493-34-5622
 E-mail: info-daigakuten@shinmeido.co.jp

■東方書店業務センター

〒175-0082 板橋区高島平1-10-2
 TEL: 03-3937-0300 FAX: 03-3937-0955
 E-mail: tokyo@toho-shoten.co.jp

— 東洋研究所創立100周年記念セールのご案内 —

東洋研究所創立100周年を記念し、本研究所出版の書籍を特別価格で販売しています。



2024 年度 東洋研究所 秋の公開講座のお知らせ 「アジアの民族と文化」

主催：大東文化大学 東洋研究所

日程・テーマ・講師	講義概要
<p>11月14日(木) 13:00～15:00 『台湾統一をめぐる 中国・習近平の政治論 —台湾政策、政治構想、歴史認識』 東洋研究所 専任研究員 すずき 木 たかし 隆</p>	<p>近年、日本社会では、中国による台湾への武力侵攻が懸念されています。ロシアのウクライナ侵略が「プーチンの戦争」とも呼ばれるように、強権指導者の歴史認識と領土観念は、21世紀の今日でも、戦争の惨禍をもたらします。</p> <p>台湾問題をめぐり、習近平・中国国家主席がどのような意見をもっているのか。その理解は、東アジアの平和を考える上で、喫緊の課題といっても過言ではありません。こうした問題意識に基づき、本報告では、習近平氏の台湾認識を検討します。</p>
<p>11月21日(木) 13:00～15:00 『NHK大河ドラマ『光る君へ』とその時代』 東洋研究所 兼任研究員 大東文化大学外国語学部日本語学科・ 同学大学院外国語学研究科 日本語文化学専攻非常勤講師 オレグ・プリミアニ</p>	<p>NHK大河ドラマ『光る君へ』の舞台は、王朝文化の最盛期、十一世紀初め的一条天皇の時代です。中宮定子に仕えた清少納言の『枕草子』、藤原道長の娘・中宮彰子入内ののちには、紫式部『源氏物語』をはじめ、和泉式部や赤染衛門など、後宮の女房の文学が花ひらきます。「三船の才」の藤原公任、能書の藤原行成、藤原斉信、源俊賢ら、道長を支えた「寛弘の四納言」の逸話を深掘りし、ドラマを百倍楽しみたいと思います。</p>
<p>11月28日(木) 13:00～15:00 『枕草子「香炉峯の雪」章段とその受容』 東洋研究所 兼任研究員 はま ぐち とし ひろ 浜 口 俊 裕</p>	<p>10世紀後半の平安時代、大雪の日に、一条天皇の中宮定子が女房の清少納言に「香炉峰の雪いかならむ」と問うと、清少納言は中国中唐の『白氏文集』をふまえて御簾を高く巻き上げたので、中宮や女房たちに賞賛されたことを『枕草子』に綴っています。この小話が中世から昭和時代までどのように広がり、受容されたか、文学・絵画・教育の面から紹介していきます。長久の時を越えて今に生きる古典文学の世界に分け入ってみましょう。</p>

- 会場：大東文化会館 3階 K-302 研修室（予定）
- 交通：東武東上線『東武練馬駅』下車徒歩3分
- 受付期間：2024年10月15日（火）～25日（金）
- 受講料：無料
- 定員：30名（先着順）

〔問合せ先〕 大東文化大学 東洋研究所
TEL：03-5399-7351 FAX：03-5399-8756 E-mail: tokenji@ic.daito.ac.jp

※ 注意事項

- ・受付は、メールによる先着順とさせていただきます。定員を超過した場合は、やむを得ずお断りの連絡を差し上げるようになります。あらかじめご了承ください。なお、お申し込み日から3日以内に完了のメールが届かない場合は、お手数ですが、メールもしくはお電話にてご連絡をお願いします。
- ・駐車・駐輪はできません。お車、バイク、自転車でのご来場はご遠慮ください。

新型コロナウイルスは2023年5月8日以降、5類感染症（感染力や重篤性などに基づく総合的な観点からみて危険性が最も低い感染症）に移行しました。講座の中止や変更等が発生した場合、東洋研究所ホームページにてお知らせいたします。

大東文化大学 東洋研究所 所報 No.81

2024年7月25日発行

印刷：(株) 東京技術協会

編集・発行 大東文化大学東洋研究所

〒175-0083 東京都板橋区徳丸 2-19-10

TEL (03) 5399-7351 FAX (03) 5399-8756

E-mail : tokenji@ic.daito.ac.jp

URL http://www.daito.ac.jp